

熊本の心「百年の生涯」を読んで

玉名市立天水中学校 3年 小山 祐輝

「人間は何のためにこの世に生まれてきたのか、というような問題がありますが、やはり人間とならんが為に生まれてきたということでしょう。」

これは福田令寿さんというお医者さんの言葉です。福田さんは小さい頃から医者を目指し、34歳の頃、熊本で福田産婦人科を開業し、仕事の傍ら無料診療所「紫苑会」を設立しました。福田さん曰く、「これが自分の目指す目標に近づくための一番の近道」だったそうです。僕は、最初の「人間とならんが為に生まれてきた」という福田さんの言葉の意味が分かりませんでした。しかし、人間となるとはどういうことか、哲学的に聞こえるこの言葉も、話を読んでいるうちに分かってくるようになりました。

このお話は福田さんが「紫苑会」を設立してからの日々を書いたものですが、その話の中で、特に印象に残っているのが、ボロボロのおじいさんとの出会いの場面です。そのおじいさんも貧しく、普通の治療を受けられなかったのでしょうか。診察室までくると、泣きながら福田さんの手を取り、何も言わず強く握ったそうです。福田さんはそのおじいさんの言いたいことを察して深くうなずくと、静かに診察を始めました。診察を終えて、福田さんは改めて医者になって良かったと思ったそうです。そんな診療所も年を追っていくごとに経営が難しくなっていき、30年余りで無くなってしまいました。多くの人に感謝されたそうです。

福田さんは活動を振り返って、「とにかくいそがしい日が続きました。子どもとはほとんど一緒に食事をしたことはありませんでした。時には眠る時間がないこともありました。それでも、楽しい毎日を送ることができました。」と語っています。

このお話を読んで、僕は「人間になるとはどういうことか」を考えました。福田さんがその生涯を費やして目指した目標、無料診療所「紫苑会」を設立した理由、答えはすぐに出てきました。人というのは、人と人が支え合う事、武田鉄矢さんも言っていました。福田さんはお医者さんになって、周りの人の命を支える人になりたかったのだと思います。そして、それが人間になるということだと信じて生きられました。でも、これはお医者さんに限らず、どんなことでもそうだと思います。

何事も行動を続ければ必ず人生の答えが出てきます。その時に、自分は人間らしく、自分らしく生きられたと胸を張って言えるように、僕はこれからの人生を生きていきたいです。